



第15回

ピットブル①

在米22年。かつては人間の専門家を目指し文化人類学を専攻。2001年からキャリアを変え、子供の頃からの夢であった「犬の専門家」に転身。地元のアニマル・シェルターでアダプション・カウンセリングやトレーニングに関わると共に、個人ではDoggie Project (www.doggieproject.com) というビジネスを設立。犬のトレーニングや問題行動解決サービスを提供しつつ、13歳になるピットブル、ジュリエットとニュージャージーで楽しく生活中。ご意見・ご感想は：info@doggieproject.com



てらぐちまほ

またテレビの全国ネットのニュースでも流されていました。

犬か人間か

巷には、新聞・テレビのニュースなどで大々的に取り上げられるような凶暴なピットブルがいることも事実です。過去の統計でも、ピットブルが関わる、人を噛んだ事件の件数は多いようです。(引用: Net Med Today: Special Report)。しかし、統計は数字を示すのみで、事件が起きた背景や状況は分かりませんし、また統計の「犬種」も報告した関係者の主観によるもので、先述した「先入観」にも関連しますが、実際には噛んだ犬がピットブルに似ている別の犬種である可能性がないとは言えません。

かつてはドーベルマンやロットワイラーが「世間の敵」のような扱いを受けていましたが、次の標的になったのがピットブルでした。ピットブルには、違法の闘犬ギャンブルやギャンブルなどによる麻薬や銃の護衛用に、無理矢理凶暴になるように育てられる犬が多いのです。そうした一匹が事件を起こしてメディアを騒がせると、結果的に「ピットブルは人間の敵。撲滅すべきだ」という極端な動きにつながり、何百匹もの「普通」のピットブルがシェルターで殺されているのです。

しかし、このピットブルとメディアの関係は180度覆ったのが、2007年に起きたNFLのスーパースター、マイケル・ウィックによる闘犬ギャンブルの発覚とその逮捕でした。今までメディアで凶暴な野獣として「世間の敵」のように扱われ続けていたピットブルが、初めて被害者として見られるようになり、「原因はピットブル(犬)ではない。それを扱う人間だ!」という世論の流れになったのです。

次回も引き続き、このマイケル・ウィックの事件を基に、ピットブルについてもっと掘り下げてお話しします。お楽しみに!

「ピットブル」と聞くと読者の皆さんは、条件反射のように「凶暴な犬」と連想するかもしれませんが。しかし、ピットブル(アメリカカン・ピットブル・テリア、アメリカン・スタフォードシエア・テリア、スタフォードシエア・ブルテリア、そしてそのミックスの総称)ほど世間で誤解されている犬種はないと思います。

メディアでの扱い

私の住む町の地元新聞に、動物関連のニュースを掲載するコーナーがあります。ある日そのコーナーを読んでみると、一つ目の記事は「〇月〇日、犬が逃げ出し通行人を噛んだ」とあり、次の記事には「〇月〇日、ピットブルが隣の庭に入り込み、隣の家の犬を噛んだ」とありました。似たようなことは以

前にもあり、犬種を明記するならばピットブルも「犬」とのみ書くべきではないのか? と不満に思っただけは、直ちに新聞社に問い合わせのメールを出しました。新聞社からは「警察の調書をそのまま記事にしただけ」という簡単な返事が届き、深い意図があつてピットブルのみを明記しているようではありませんでした。こうした些細でも無責任な行為が「ピットブルはすべて凶暴」という先入観を読者に植え付けていると思います。

地元紙は「特別な意味はない」と否定しましたが、動物愛護団体ASPCAの調べによると、犬が人を噛んだ事件をメディアに連絡しても、噛んだ犬がピットブルでないと記事や映像にする興味を示さないようです(引用: National Canine Research Council)。この調べでは、ある4日間に起こった、犬が人を噛んだ事件がメディアに取り上げられた件数を追ってみましたところ、雑種(犬種明記なし)の場合は地元紙に1〜2回掲載されただけなのに対して、ピットブルが関係した事件の場合は地

The New York Times



カリスマドッグトレーナーのシーザー・ミランと飼い犬のピットブル「ダディー」



元・全国紙だけでなく、海を越えた外国まで伝わり230もの記事が掲載され、